

## グータラ開拓団、いざ北海道へ！



財団法人北海道地域総合振興機構参与  
**田口 邦廣**

### 暑い夏の東京から北海道を思う

今年の東京の夏は地獄だった。来る日も来る日も35度を超える日が続く。ついには寒暖計が40度を超える、一番気温が下がるはずの夜明け前でも30度以下にならないという、気の遠くなるような日々を過ごした。夜も含めて一日中、エアコンをつけ放しにしていたためか、疲労感が抜けないで往生している。

この6月、40年以上の会社勤めから解放された年金生活1年生の私も、先輩たちが常々言っていたとおり、サラリーマンを辞めて初めて、東京の夏がこんなにも暑いものだったのか、ということを思い知った次第である。

サラリーマンの間は、日中は快適に温度コントロールされたオフィスで働いている訳だし、通勤や移動に使う電車もタクシーも冷房が利いている。もちろん、瞬間的には暑い思いはするのだが、そんなに長い時間をエアコンなしで過ごすということはないのだ。しかし、家にいるとそんなわけにはいかない。普通の家庭で全館冷房ということはないだろうし、通常、身体のためを思えば冷房をつけ放しにはしないからだ。

そんな中、寝苦しい夜になると決まって思い出すのが、昨年の6月まで4年間お世話になった北

海道の夏。たまさか日中に30度を超えたとしても、日が傾くとともに気温は下がり始め、やがて至福の黄昏どきを迎える。もちろん、夜はきちんと布団をかぶって寝ないと風邪を引いてしまうし、ほとんど暑さらしい暑さを経験しないうちに夏が過ぎ去ってしまった年もあった。だからこそ、短く、はかない夏をいとおしむように過ごした日々が懐かしい。北海道を離れて以来、できることならば夏の間でも北海道で暮らしたいと思っていた。

### 北海道カントリーホーム構想

そんな北海道への思いが通じたのか、昨年の秋、はまなす財団から声がかかった。北海道版田舎暮らしを進める勉強会を開くので、東京のサラリーマンの立場から意見を言いに来い、というものであった。北海道に行く口実ができたと軽い気持ちで委員をお引き受けしたが、頂いた「北海道カントリーホーム構想検討会」の名簿を見て驚いた。委員長には、今や農業・農村振興の伝道師として、全国にその名を知られる、相馬暁拓殖大学北海道短期大学教授、委員長代理にはホクレンのトップから道の副知事を歴任された西村博司(社)北海道地域農業研究所理事長、委員として、板谷長沼町長、斎藤由仁町長、向井隆北海道電気サービス(株)会長などそうそうたるメンバーである。そんな中に、私の名と、恵庭でサンガーデンという大きな花苗屋さんとカフェを営み、ご自身も新規就農農家である土谷美紀さんの名前が、失礼ながらやや場違いという感じで並んでいた。

しかし、3回に及んだ検討会は、実に和やかな雰囲気の中で、さまざまな立場から熱心な議論が戦わされ、実りあるものとなった。特に、農家暮らしを実践されている相馬先生や土谷さん、向井さんの話には興味が尽きず、いつまでも聴いていたい気分にさせられた。そんなわけで、検討会は予定時間を大幅に超過してしまうのが常となつたが、検討会の結論として、

- (1) 農村を居住の場と考えている都市住民は、農村の人たちが考えているよりも、ずっと多いこと。
  - (2) 居住の仕方としては、クライインガルテン（市民農園）の延長型としての週末利用タイプ。夏の間だけ農作業やガーデニングを楽しむ季節利用型。そして、将来の就農を見越して定住する農家予備軍型の三つがあること。
- 特に、本構想の基幹を成している季節利用型は、

(そのために、私に声がかかったのだろうが) 年金生活者や自由業の人などに大きな潜在需要があることが分かった。

### 季節利用型居住の効用

そういう意味では、これから数年以内には800万人ともいわれる団塊の世代が定年を迎える、その需要が急増することは間違いない。なぜならば、都会の生活コストは農村の倍以上であり、不足分を稼ごうにも、そのキャリアにふさわしい仕事など都会では見つかるはずがないからだ。

これに対して、農村では何をするのも手間ひまを必要とするが、逆にお金はかかるない。農繁期など、猫の手も借りたい時期には手伝いに出なければならぬが、農作業の補助的な仕事を手伝ったからといって、プライドが傷つくこともないだろうし、よく整備された農村関連の諸施設をほとんど無料で利用することも可能だ。

一方、受け入れる農村地域の側から言えば、労働力として大して期待できない上に、福祉や医療費がかさむことなどで、概して否定的な対応をするケースが多い。せめて都会の財産を処分して定住してほしいと考えているはずだ。しかし、北海道の冬は厳しい。私のように北海道大好き人間でも、北海道の冬のことを考えると憂うつになる。そこで、「冬の間はどうぞ都会にお帰り下さい」ということにしたら、どうだろうか。たとえ通年でなくとも、長期間居住すれば、地元の商店の売り上げに貢献することになるだろうし、さまざまな有料サービスの需要が発生する。また、30年、40年に及ぶ都会生活の間に培ったノウハウや人脈は、地域にとっても掛替えのない財産となるはずだ。

### なぜ余生を故郷でなく

思えば、私自身も大学に進学するまでは、九州、天草島の田舎町で過ごした。私たちの世代の大半は農山漁村で生まれ、そこで育ったはずだ。一昔前までは、そうやって都会に出ていった若者が功成り名を遂げた後、引退して余生を故郷で過ごす、というパターンがあった。そういう形で、農村で訓育された人材が、都会で獲得した富や人脈の一部を抱えて農村に還流して、その富をもって農村の次世代の人材を訓育し、都会に送り出す、という循環があったのではないだろうか。こうやって地方の秀才が都会に出ていき、この国の発展に力を尽くす、というのが日本の近代化の歴史であつたように思われる。しかし、高度成長以降、都会

に出ていったものは、私も含めて都会にマイホームを建築し、故郷とは無関係な生活を送っている。

確かに、私たちのような地方出身者が農村へ戻るとすれば、故郷に戻ればよいと思われるのかも知れないが、これが意外と難しい。何百年にも渡り、何世代もかけて出来上がった地域コミュニティは、きわめて緊密な絆で結ばれているものであるが、そこから離れて数十年も都会で勝手気ままに暮らしてきた身にとって、再びそこに帰っていくことは、正直言って気が滅入るものである。

### 北海道の魅力は“おおらかさ”

それに対して、北海道の持っている“おおらかさ”。全国から集まってきた人々が肩を寄せ合い、厳しい自然と闘いながら築いてきたコミュニティは、本州等に較べれば程よい距離が保たれ、都会人にとってはまことに都合が良い。もちろん、私が体験しているのは札幌だけなので、「北海道だって田舎に行けば、結構閉鎖的な面もあるんだよ」と言われるが、札幌にいてもその片鱗をうかがい知ることはできると思っている。なぜならば、札幌は東京や大阪や京都などとは全く違う雰囲気を持ったマチであるからだ。

このため、情緒がないとか、マチの構造が平板であるとか、数多くのばり雑言が浴びせられているが、私たち都会の住民の目から見ると、北海道の人には、どうも北海道の素晴らしいしさが分かっていないようだ。確かに経済的には苦境にあるかも知れないし、若い人たちに魅力的な勤め先がないのかも知れないが、だからといって、生活に困窮し、路上生活者がマチに溢れているわけでもない。清潔だといえば札幌ほどの清潔感のあるマチもない。そこにいる人々は一様に人懐っこく、開放的でたくましさを併せ持っている。

そんな仲間たちと、夏の夕方、馬追丘陵辺りのカントリーホームから、そろそろ札幌の灯りが点灯し始めた中、遙か日本海に沈む夕日を眺めながらビールでも飲み、早朝からの渓流釣りを話題に至福のときを過ごしたい、という密やかな野心を抱いている。

#### profile 田口 邦廣 たぐち くにひろ

1939年生まれ。熊本県出身。

'63年長崎大学経済学部卒業後、日本電気（NEC）に入社。NEC人事部長代理、勤労部長、理事、NECソフトウェア常務取締役、NECソフトウェア静岡社長、NECソフトウェア北海道社長、NEC通信システム顧問を経て、'04年7月より現職。